

## 「美」ということを中心として



榎原和彦氏  
(大阪産業大学教授)

## 略歴

1946年名古屋市生まれ。1968年京都大学工学部卒業、1970年同大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。大阪産業大学工学部教授などを経て、現在に至る。  
専門は土木デザイン、環境デザイン、土木景観論・景観工学。

**建築(古代土木を含む)に求められる“用”“強”  
“美”は環境においても求められるべき**

- 建築では古代から今まで変わることなく“用”“強”“美”的三つの価値を問題としてきた。
- WHOの言う居住環境の保健性、安全性、利便性、快適性は、“用”に対応する。しかし、“強”“美”は環境に関して言われていない。私流に整理すれば、“強”は持続可能性に該当し、これらに対応して“美”を位置づけなければならない。
- 環境形成という観点からは、戦後、最初は災害に対する安全性が問題となり、次いで安く早く大量に土木をつくる時代を経て、反公害、自然環境の問題や歴史的環境や都市環境といった快適性の問題が考えられるようになった。



### 機能効率主義からシビックデザイン、そして新合理主義へ

- 土木では、機能・効率主義から美(デザイン)への傾斜を経て、新合理主義(美用強コストなど総合的に配慮)へという流れを見ることができる。
- 1990年頃にシビックデザイン委員会、縁立つ道のデザイン委員会や京都第二外環の景観委員会の報告書が出された。1999年には環境と管理を考慮した橋梁委員会(京都第二外環状道路)が設置され、この頃、環境景観に関する10のキーワードのうち、コスト、メンテナンス、安全性が重視されるようになった。
- それが今また、“美”を重視し、目的化しよう

ということになってきている。

### アメニティという言葉、 美に関する論調

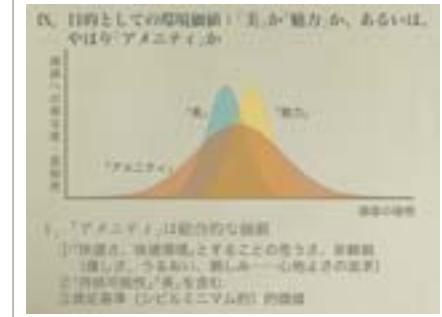
- 「現代用語の基礎知識」では、70年代後半から「アメニティ」の語が出始め、80年代後半には「都市アメニティ」が出てきた。しかし、90年代の終わり頃急に使われなくなつた。この手の概念には流行、廃りがあるようを感じる。
- バブルの絶頂期から終焉期に、「次の時代の新しい物差しは“美”」、「美と名誉を重んずるノブレス国家へ」など“美”に関するいくつかの論調があった。しかし、経済停滞期に入つてなくなった。一時の流行であったようだが、こういうことを繰り返してはいけない。



### 美と魅力とは別であり、 美を追求すべき

- “美”は最高の環境の価値たりえるかどうか。
- 環境の価値として“美”“魅力”“アメニティ”がある。もはやアメニティは当然のものとなり、その上に何を求めるかという時代に入っている。“美”と“魅力”とは別のものであり、

どちらを目的とするのか決着をつけておく必要がある。私としては“美”をとりたい。



### 環境の美を作るために 美しい土木を目指す

- 美の内部目的化だが、美しい土木を作ることは美しい風景を作ることに等しいかどうか。第二京阪道路の例で見ると、構造物としては美しいものをつくった自信はあるが、美しい風景をつくれたかどうかは疑問である。
- 景観アセスメントは、プロジェクトを変える、さらには阻止するというところまでいかなければならぬのではないか。



- 環境の美を作るために土木を手段的に使うということはあり得る。自然風景のスケールに合致した橋があることにより河川の風景がより活きるということがある。

- 公共投資が欧米に比べて立ち遅れている

からといった議論が通用しなくなっている中で、公共投資の最後の目的は環境共生や美といったことになるかもしれない。

### 美意識の確立が重要な課題

- 今、日本では美意識に問題がある。政策大綱にコンセンサスの状況に応じて施策展開とあるが、これはやや及び腰に見える。積極的に啓蒙することも必要である。
- 知も美を理解する要件であり、美意識の確立が非常に重要な課題となる。
- アンケートの自治体の景観評価を見ると、美しくないのに美しいと思い込んでいる、醜いものを見逃している、美よりも魅力やアメニティに重点を置いている、公共投資の成果を誇示しているといったパターンが見られる。
- 社会的・経済的価値の側面で、美を無視あるいは軽視しているという感じがする。



### 美意識の変化を迫られる事態も

- 震災後の構造基準による構造物の変容、国土の構造的变化などに伴う美意識の変化もある。

